

古文書のAMS¹⁴C年代

— 近世の古文書と浄瑠璃寺阿弥陀如来像印仏の測定結果 —

小田寛貴¹⁾，増田 孝²⁾

1) 名古屋大学年代測定総合研究センター 〒464-8602 名古屋市千種区不老町

2) 愛知文教大学 〒485-0802 愛知県小牧市大草年上坂 5969-3

我々は1998年より、加速器質量分析法による¹⁴C年代測定が、古文書の年代判定法としてもつ有効性と限界とを示すことを目的として、書跡史学の見地から年代を求めた古文書の¹⁴C年代測定を名古屋大学加速器質量分析計1号機を用いて行ってきた。1998年度には、平安末～鎌倉初期の「十一面観音法」紙背書状と文保二年の大嘗祭に際してのものと考えられる右少弁吉田冬方奉御教書、二点の測定を行い、1999年3月に発行された業績報告書においてその研究結果を報じた（小田・増田ほか，1999）。また、1999年度にはさらに五点の古文書資料について測定を行い、その結果を古経典について得られていた結果とあわせて、2000年3月の業績報告書において報告した（小田・増田ほか，2000）。こうした研究から、和紙は“old wood effect”による誤差（ずれ）が小さく、暦¹⁴C年代が歴史的年代と大きく異なるものではないことを明らかにしてきた。

本年度は、さらに五点の資料について測定を行った。今回の測定は、これまでの研究の延長線上に位置するものであり、その測定結果はこれまでの成果から得られている結論を補強するものとなった。そこで本報は、今年度測定を行った五点の資料について、その解説と¹⁴C年代測定の結果を報じるものとする。また、京都浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来像の胎内に納められていたと伝えらる印仏三点についても測定を実施したので、その結果もあわせて報告する。実験手順等についてはこれまでの報告にあるとおりであるが（小田・増田ほか，1999；小田・増田ほか，2000），今年度より測定には名古屋大学加速器質量分析計2号機を用いた。

<古文書資料 No. 8～12 の¹⁴C年代>

前年度までに測定を行った七点の史料に続き、資料番号を以下のようにNo. 8～12とした。なお、これまで測定を行った資料は、表1に示したとおりであり、その詳細については昨年度の報告書を参照していただきたい（小田・増田ほか，2000）。

・資料 No. 8 宝叔宗珍安名

（翻字） 山城州之産善男子授
衣鉢法名曰
宗鶴
慶長廿年乙卯暮春如意珠日

前龍宝前席宝叔宗珍書之

(解説) 宝叔宗珍(1554-1617)は大徳寺の住持(135世)である。安名とは出家得度した人に僧侶が書き与えた法名のことである。またその文書も安名とよぶ。これはその安名の原本であると考えられる。

文意は山城国に住む信男に、衣鉢(師の衣と鉢)と法名を授ける。曰く「宗鶴」と。この文書の書かれたのは慶長二十年(1615年)三月如意珠日(願を叶えられる日)である。また「前龍宝前席」とは大徳寺の前住職の意である。

・資料 No. 9 瑞竜寺仮名消息

(翻字) くはうさま(公方様)より仰として御ふみのやう
かたしけなくそんし候
御しよく(即)位もすみまいらせ候
めてたくそんし候かしく
今度江戸より
御しうき(祝儀)に御しん上のよしにて
此御なか十ゆいはいりやう(拝領)申候て
かたしけなさめてたく
いく久しく御機けんよく
めてたき御事のミにて
はいりやういたし候やうニと
いわせ(祝)入まいらせ候よきやうニ
御心得候て御ひろうたのミ入まいらせ候
めてかしく
(捻封) 長はしとのへ すいりやうし(瑞竜寺)

御返事

(解説) 日蓮宗尼門跡瑞竜寺の長橋の局宛の手紙である。瑞竜寺はもと京都今出川村雲にあったことから、村雲御所とよばれる。豊臣秀吉の姉瑞竜院妙恵日秀尼が慶長五年(1600年)に創建した寺院で、寺地と寺号は後陽成天皇が与えたという。ちなみに、瑞竜寺一世は日秀(1533-1625)といい、二世は瑞円院日怡(1625-1664)といい、同三世は瑞照院日通(1653-1672)といった。では、この手紙の筆者が誰かという、これらのいずれかが書いた可能性があるものの、俄には決めることが出来ないのが実情である。

・資料 No. 10 某(後□)書状

(翻字) 御返書なから令拝見候先日は
緩々御馳走浄知忝かりにて候
御書之旨可申届候 方丈様御
光儀之事定日難御計之旨

尤候いつにても御透次第可被成候
然は 相国様之儀つゐにハ御
他界定而御驚可被成候増上寺ニ而
可有御葬礼之通近邊へ申来候
良岳和尚正月十二日ニ入院之由申候
少々豊前殿迄御届ニ御見廻尤存候
方々より見廻衆御座候恐惶頓首正晦日（花押）

（返し書き）

「萬々期後顔之節候以上」

（端裏上書き）

「より

（結封） □翁院様 後□

御報

（解説） この書状の筆者は不明（「後□」と読める）である。本文中に「相国様之儀つゐにハ御他界定而御驚可被成候増上寺ニ而可有御葬礼之通近邊へ申来候」と書かれているところから、この書状が、その情報をいち早く入手できた人のものであることは、ほぼ間違いない。ここでいう「相国様」とは徳川秀忠と考えられる。秀忠が没したのは寛永九年（1632年）正月二十四日である。諸大名へこのことが知らされたのは二十九日のことであり（『寺慶卿記』同日条）、これらのことからして、本書状はこの年同日晦日のものであろうと考えられるのである。「豊前守」は天野長信（東福門院付きの侍）、「良岳」は了学遊嶽（増上寺の住職）であろう。

このようなことから、本書状は寛永九年正月晦日のものであろう、という推定が成り立つのである。

・資料 No. 11 葉室頼重書状

（翻字） 今日可有
宣下之事如例
可令沙汰給候
宿紙拂底之
間先内々申入候也
（付け年号）「元禄二」
正月廿九日頼重
（返し書き）
「追而上臈局當今御母御也准后 宣下ニ候刻限未刻ニ候也」
大外記殿

（解説） 付け年号にあるごとく、元禄二年（1689年）の、当今（東山天皇）の母君である敬法門院藤原宗子（松木宗条の女）准后宣下に際しての葉室頼重の書状。宛所は大外記

押小路師庸．宿紙払底の旨を告げている．元禄期（江戸中期）の紙の結果がどのようなものとなるか，という点に関心が持たれる．

・資料 No. 12 口宣案

（翻字） 上卿 観修寺大納言
延寶九年正月五日宣旨
藤原兼成
宜叙従五位下
藏人左少辨藤原熙定奉

（解説） この口前案は，延寶九年（1681年）正月五日に水無瀬兼成を従五位下に除する時のものである．例によって，これは宿紙（薄墨紙）に書かれたものであり，問題はこれが近世前期末葉のものであることと，宿紙の原料として楮に混入される墨が，結果としてその測定値にどのような影響をもつか，ということである．

なお，宿紙とは再生紙の一種で，本来は，いったん使用された楮を漉き返したものであったが，本紙に見られるように，近世のものも多くはあらかじめ墨を混入して薄墨色にしたもののようである．この場合の古紙の混入率は，ほとんど皆無に近かったのではないかと考えられる．

表1 古文書資料一覧

資料 No.	名称	歴史的年代
1	「十一面観音法」紙背書状	平安末～鎌倉初期
2	鎌倉時代紙背書状	鎌倉初期
3	右少弁吉田冬方奉御教書	鎌倉末期～南北朝（1318年，文保二年）
4	某（近衛兼嗣？）書状	永徳元年（1380年）
5	徳大寺実時書状	嘉慶二年（1388年）
6	徹岫宗九安名	弘治元年（1555年）
7	春林宗叔安名	永禄五年（1562年）
8	宝叔宗珍安名	慶長二十年（1615年）
9	瑞竜寺仮名消息	1533-1672年
10	某（後□）書状	寛永九年（1632年）
11	葉室頼重書状	元禄二年（1689年）
12	口宣案	延寶九年（1681年）

加速器質量分析計による¹⁴C年代測定は同一のグラフィイトターゲットについて三回行った．得られた¹⁴C年代は校正曲線（Stuiver *et al.*, 1998）に従い暦年代に換算した．その結果をまとめたものが表2である．

表 2. ¹⁴C 年代測定結果

試料 No.	¹⁴ C 年代 [BP]* ¹	暦 ¹⁴ C 年代 [cal AD]* ²
8 (1)	309±29	1519(1531, 1544)1591, 1623(1635)1642
(2)	305±29	1520(1533, 1540)1587, 1625(1636)1643
(3)	363±34	1470(1489)1523, 1566(1604, 1607)1627
av.	326±18	1517(1524)1532, 1542(1563)1596, 1619(1629)1636
9 (1)	89±30	1693()1726, 1812()1853, 1858(1891, 1908)1919, 1949(1950)1952
(2)	127±33	1679(1690, 1728)1741, 1751()1757, 1804(1811)1889, 1909(1921)1936, 1947(1948)1950
(3)	135±28	1678(1687)1704, 1721(1730)1744, 1747()1759, 1803(1809)1817, 1829()1882, 1914(1924)1937, 1946(1948)1949
av.	117±18	1686(1694)1712, 1717(1726)1730, 1809(1813, 1847, 1875)1886, 1911(1918)1924, 1948(1949)1950
10 (1)	257±46	1534()1537, 1637(1650)1665, 1784()1789
(2)	231±35	1646(1659)1669, 1781()1796
(3)	269±40	1531()1545, 1635(1645)1659
av.	252±23	1643(1651)1660
11 (1)	153±34	1671(1681)1693, 1726(1735)1779, 1798(1806)1813, 1851()1861, 1918(1932)1944, 1945(1947)1949
(2)	131±28	1679(1688)1707, 1719(1729)1741, 1751()1757, 1804(1810)1821, 1827()1884, 1913(1923)1936, 1947(1948)1950
(3)	119±31	1682(1693, 1726)1734, 1806(1813, 1851, 1861)1892, 1908(1918)1931, 1947(1949)1950
av.	134±18	1681(1687)1695, 1725(1730)1735, 1806(1809)1813, 1840()1876, 1917(1924)1933, 1947(1948)1949
12 (1)	159±29	1671(1679)1689, 1729(1740, 1753, 1756)1779, 1798(1804)1811, 1922(1935)1945, 1945(1947)1948
(2)	178±34	1664(1674)1684, 1732(1777)1784, 1788(1800)1808, 1928(1941, 1946)1947
(3)	179±30	1665(1673)1682, 1734(1777)1784, 1789(1800)1807, 1930(1942, 1946)1947
av.	172±18	1670(1675)1681, 1735(1776)1780, 1797(1802)1806, 1933(1939, 1946)1947

*1: 三回の測定結果を(1)~(3)として示した. av. とあるのはこれらの平均値である.

*2: ()内の数値は ¹⁴C 年代の中央値を校正した値であり, ()外の数値は誤差の両限を校正した結果である.

今年度は主に 17 世紀の古文書について測定を行った. その暦 ¹⁴C 年代は, 前年度までに測定を実施した資料 No. 1~7 と同様に書跡史の立場から求めた年代とよく一致しており, 和紙は“old wood effect”による誤差(ずれ)が小さく, 暦 ¹⁴C 年代を歴史学的年代と考えることができるとするこれまでの結論を支持する結果である.

しかしながら, 17 世紀半ばから大気圏内核実験の影響が現れる 20 世紀半ばまでは校正曲線が横這いになる時期であり, 資料 No. 9, 11, 12 に見られるように得られた暦 ¹⁴C 年代は, 約 300 年の範囲にわたっている. 同様の現象は 800BC~400BC 頃の 400 年間にも現れるが, 古文書などの ¹⁴C 年代測定において問題となるのは, この 17 世紀後半から 20 世紀前半までの期間であろう. 暦 ¹⁴C 年代が数百年にわ

たるこうした時期の資料に対する一元的な年代測定法として、ウィグルマッチングとよばれる方法が開発されている。しかし、対象資料が数百年の年輪をもつ樹木資料に限られるため、古文書の年代判定法としては利用できないであろう。17世紀後半から20世紀前半までの古文書は、 ^{14}C 年代測定法のみによっては互いに識別することはできない。この問題は、古文書年代判定法としての ^{14}C 年代測定がもつ限界のひとつである。

また、本年度は宿紙（資料No. 12）の測定も実施した。宿紙とは、一度使用された紙を漉き直して作製された紙である。もとの墨が完全に脱色されておらず、全体が灰色を呈することから薄墨紙ともよばれる紙である。 ^{14}C 年代は料紙の一物理的属性であり、宿紙について ^{14}C 年代測定法を適用した場合、漉き直される以前の一次使用の年代を与えるはずである。宿紙は本来このような再生紙であったのだが、近世に至るとあらかじめ墨を添加するようになり、漉き返しの紙ではなくなっている。資料No. 12はまさに近世前期末葉の宿紙であり、古紙から漉き直されたものではないと考えられる。添加された墨が料紙に比べて古いものである可能性も否定はできないが、そもそも添加される墨の量も炭素の重量としては文書料紙のそれに比べ少なかったであろうし、 ^{14}C 年代に影響が現れるほど古いものは用いなかったと考えてよいであろう。事実、資料No. 12の ^{14}C 年代値も文書の作成された年代から古くはなっていない。では、近世以前の再生紙として生産された宿紙の ^{14}C 年代を測定した場合、どのような結果が得られるであろうか。文書・経典の一次使用から漉き直されて利用された二次使用までにどの程度の時間差があるか。宿紙・紙背文書などの ^{14}C 年代測定を行うことで、こうした問題についても研究を進めていきたい。

<浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像印仏の ^{14}C 年代>

1998年以来、書跡史の見地から年代を求めた古文書について ^{14}C 年代測定を行い、和紙が歴史時代を対象とした ^{14}C 年代測定にとって極めて適した資料であるということを示してきた。そこで、今年度は書跡史の立場からは年代を特定することが困難であった和紙資料「浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像印仏」について ^{14}C 年代測定を実施した。

平安中期、永承二年（1047年）に創立されたと伝えられる京都府加茂町の浄瑠璃寺には、現存するものとしては唯一の九体阿弥陀如来像が安置されている。その制作の経緯等については明らかにされていないが、浄瑠璃寺創建と同時期に作製されたものと考えられており、その作者には平安中期の仏師定朝（?～1057年）をあてる説がある（清岡・佐伯，1976）。

測定試料は、この九体阿弥陀如来像の胎内に収められていたと伝えられる印仏である。これはいわゆる古文書ではなく、木版によって刷られた版画であり、縦十段横十列の百体一版の版木を用い印刷したものと、縦四段横三段の十二体一版の版木を用い計八十一体（縦九体横九体）を一紙に印刷したものが知られている。この八十一体の印仏には墨書銘のある紙片を貼り付けたものがあり、それによると長治二年（1105年）五月十五日に、一紙に八十一体の阿弥陀如来像を摺ったものを五十枚、九体阿弥陀如来像の中尊の胎内に収めたと記されている（清岡・佐伯，1976）。これら印仏の刷られた年代については、以上のように平安期と伝えられているが、印刷物であるため後世に刷られたものである可能性も

あり、年代を判定することはできなかった。

測定は三資料について行った。百体一版の版木を用いて一紙に百体を印刷したものの二点（資料 No. 1, 2）と、縦四段横三段の十二体一版の版木によって一紙に七十二体が印刷されたもの一点（資料 No. 3）である。なおこの資料 No. 3 については、十二体一版の版木を用いており、先に述べた一紙八十一体の印仏と同系統のものである可能性がある。

表 3 にあるとおり、いずれの資料についても 11 世紀～12 世紀前半との測定結果が得られ、これら三資料はいずれも伝承通り平安中～後期のものであることが示された。

今回の三資料の測定結果のみから浄瑠璃寺印仏全ての時期を推定することはできないものの、これらが版画史・彫刻史などの研究者によって今後検討されれば、浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像そのものの造立年代に関する問題を含め、美術史の研究に寄与する点は少なくないと期待できる。

表 3. 浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像印仏の ^{14}C 年代

試料 No.	^{14}C 年代 [BP]* ¹	暦 ^{14}C 年代 [cal AD]* ²
1 (1)	983±36	1018(1024)1038, 1142()1150
(2)	956±47	1021(1035)1073, 1077()1132, 1135(1144, 1146)1159
(3)	1005±36	999(1020)1030
av.	981±23	1020(1024)1035, 1144()1146
2 (1)	990±30	1018(1023)1035, 1145()1146
(2)	1038±32	983(1001, 1014, 1015)1021
(3)	1040±38	981(1000)1021
av.	1023±19	998(1018)1021
3 (1)	965±29	1022(1031)1042, 1094()1118, 1140()1153
(2)	978±37	1019(1025)1040, 1099()1116, 1141()1151
(3)	954±36	1023(1036)1066, 1084()1124, 1137(1144, 1147)1157
(4)	1018±32	996(1018)1024
(5)	971±35	1020(1028)1042, 1093()1118, 1140()1153
(6)	1045±34	981()999)1020
av.	989±14	1020(1023)1029

*1: 三回ないし六回の測定結果を (1), (2), … として示した。av. とあるのはこれらの平均値である。

*2: () 内の数値は ^{14}C 年代の中央値を校正した値であり, () 外の数値は誤差の両限を校正した結果である。

<謝辞>

竹僊堂の羽田朋男氏、ならびに、かうなやの佐佐木 尋氏には、貴重な資料を提供していただくとともに、多くの有益な御助言を賜りました。記して深く感謝いたします。

本研究の一部には、日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究（A））、課題番号：12780106、研究代表者：小田寛貴）を使用した。記して謝意を表します。

<参考文献>

- 小田寛貴, 増田 孝, 中村俊夫 (1999) “加速器質量分析計による古文書の放射性炭素年代測定 — 書跡史の立場から見たその可能性と限界 —” 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, X, 60-67.
- 小田寛貴, 増田 孝, 吉沢康和, 藤田恵子, 中村俊夫, 古川路明 (2000) “加速器質量分析計による古文書および古経典の ^{14}C 年代測定” 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XI, 123-145.
- 清岡卓行, 佐伯快勝 (1976) 『古寺巡礼 京都 7 浄瑠璃寺』, 淡交社, 154p.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Back, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plicht, J. and Spurk, M. (1998) “INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP” *Radiocarbon* 40(3), 1041-1083.

Radiocarbon Ages of Ancient Japanese Documents

Oda, H.¹⁾ and Masuda, T.²⁾

- 1) Center for Chronological Research, Nagoya University, Nagoya 464-8602, Japan
- 2) Aichi Bunkyo University, Komaki, Aichi 485-0802, Japan

We have been worked on radiocarbon dating of ancient Japanese documents written dates of which are known. In 1998 and 1999, we measured seven radiocarbon ages of ancient documents by using Tandetron accelerator mass spectrometer at Nagoya University. This paper reports five radiocarbon ages of ancient Japanese documents, which were measured in 2000 and 2001 by using new Tandetron accelerator mass spectrometer. The calibrated radiocarbon ages are in good agreement with the corresponding historical ages. It was shown by radiocarbon dating of the ancient documents that Japanese paper has little gap by “old wood effect”; accordingly, ancient Japanese document is a suitable sample for radiocarbon dating of recent historic period.